エクセレンスの大学，人文学，都市

―― 大阪市立大学文学研究科のこの 10 年を文脈化する ――

海老根 剛

◆要　旨

この試論の主題は，大阪市立大学文学研究科の過去 10 年間の歩みをいくつかの観点から考察し，現在研究科が直面している状況の一端を明らかにすることである。大阪市立大学文学研究科のこの 10 年間の軌跡を振り返るとき，その起点に見出されるのは文部科学省「21 世紀 COE プログラム」の採択（2002 年）である。「都市文化創造のための人文科学的研究」という題目のもと，「都市文化学」という新たな学際的学問領域の確立を目指したこのプログラムは，都市・大阪・アジアという今日の文学研究科の研究活動における重点領域の形成に寄与するとともに，「都市文化研究センター」や「インターナショナルスクール」といった今日の文学研究科を特徴づける組織を生み出した。文学研究科の過去 10 年間は，良くも悪くもこの COE プログラムの遺産によって規定されていたと言うことができる。本論ではまず，こうした文学研究科の歩みをより広い視点から考察するために，ビル・レディングズによって提出された「エクセレンスの大学」という概念を導入する。というのも，文科省の COE プログラムもまた，高等教育のグローバル化の文脈における「エクセレンス」の追求の日本における現れだからである。そのうえで本論は，ドイツと日本の大学におけるエクセレンスの追求の具体的な進展を比較検討する。これによって日本の大学改革がグローバルに進行する構造変化の一部であることが明らかになる。こうしたエクセレンスの追求は理系中心に進行するため，しばしば人文学の危機として論じられる。本論ではドイツにおいて人文学の危機を考察したハンス・ウルリヒ・グンブレヒトの分析を参照し，彼が人文学の核心にあるとみなす「リスクをはらんだ思考」を検討する。最後に本論は，以上の考察から得られた認識にもとづいて，大阪という大都市に立地する文学研究科の現状と今後の課題について簡潔な考察を加え，結論とする。

キーワード：エクセレンス，人文学，大学改革，都市，グローバル化

（2014 年 9 月 5 日論文受付，2014 年 11 月 7 日採録決定　『都市文化研究』編集委員会）

50 周年から 60 周年へ

2003 年 7 月 20 日，大阪市立大学文学部は朝日新聞社との共催で，文学部創立 50 周年記念フォーラムおよび国際シンポジウムを大阪国際交流センターで開催した。磯村隆文市長（当時）も来賓として出席したこの催しは，「卒業生を中心に 1000 名近い参加者で会場がほぼ満員となる盛況」であったという[1)]。このとき刊行された創立 50 周年記念誌には『明日への飛躍』というタイトルが付されているが，当時を知る先生がたのお話でも，50 周年を迎えた文学部教員団の雰囲気は非常に前向きであり，一致団結して前進していこうという気概に溢れていたという[2)]。当時の文学研究科・文学部のそうした雰囲気は，2003 年 7 月がどのような時期に当たっていたのかを思い返してみるならば，不思議なことではないのかもしれない。大阪市立大学文学研究科は，2002 年 10 月，文部科学省（以下，文科省と略記）「21 世紀 COE プログラム」（以下，COE と略記）の拠点に採択された。「都市文化創造のための人文科学的研究」と題されたこの拠点形成プロジェクトは，歴史学を核としながらも都市文化を研究対象とする人文学諸分野を包括する「都市文化学」の確立を目標に掲げ，この新しい学問分野の教育研究拠点として「都市文化研究センター」を設立した。この都市文化研究センターの活動成果を公表する学術誌として創刊されたのが，本誌『都市文化研究』である（2003 年 3 月）。この COE のプロジェクトでは，さらに海外 6 都市にサブセンターが設置され，国際的な研究活動も活発化していくことになる。当時 50 周年を迎えた

文学部（および文学研究科）は，COE の潤沢な資金を背景に，研究教育環境の劇的な変化の直中にあったわけである。

一方，2013 年 12 月 8 日に開催された文学部 60 周年を記念する催しは，まったく異なる雰囲気に包まれていた。それを一言で言い表すならば，反省的ということになるだろう。そして，反省の焦点となったのは，シンポジウムのタイトルが示す通り，「都市文化研究」だった。というのも，2003 年以降の文学研究科の 10 年間は COE とその遺産の 10 年間であり，現在の文学研究科のかたちは，良くも悪くも COE で打ち出された都市文化研究という方向性に規定されているからである。研究という観点から見た場合，現在の文学研究科の三枚看板は「都市」「大阪」「アジア」であるが，この重点化の原因ではないとしても，それを加速した要因として指摘できるのは，2004 年 11 月に公表された COE の中間評価である。「このままでは当初目的を達成することは難しい」という厳しい評価を受けて組織が再編され，研究の対象と拠点が大阪・アジアに限定されたのである[3)]。その後，こうした都市・大阪・アジアへの重点化は，部分的には教員の採用や配置にも反映されることになった。教員の総数が 93 名（2003 年度）から 69 名（2013 年度）へ減少する中で遂行されたこの重点化が，研究科全体の教育研究活動に少なからぬ影響を与えたことは間違いない。他方，現在の文学研究科を特徴づける組織である「都市文化研究センター」や「インターナショナル・スクール」もまた COE の遺産である。これらの組織は COE 終了後も様々に形を変えながら活動を継続しているものの，現在にいたるまで確固たる実質と明確な輪郭を獲得できずにいる。こうした点に留意するなら，60 周年を記念する催しが反省的な雰囲気に包まれていたのも当然のことだと言えるだろう。

本論で試みられるのは，大阪市立大学文学研究科のこうした 10 年間の歩み，とりわけ COE がもたらした遺産の詳細な検討ではない。この試論の目的は，狭くは大阪市立大学文学研究科の研究活動，広くは今日の大学における人文学一般が置かれている状況を，いくつかの補助線を引きながら考えてみることである。

最初の補助線は「エクセレンスの大学」という視点である。これはイギリスで生まれ，アメリカやカナダの大学で教えた文学理論家ビル・レディングズが提唱した概念である。レディングズは，グローバル化の進展にともなって生じた大学の社会的役割と自己理解の変容を，この概念を用いて分析している。大阪市立大学文学研究科における「都市文化研究」と「都市文化研究センター」の形成もまた，エクセレンスの中心（center of excellence）として大学がみずからを定義する動きの中で生じたものであるので，この動きが何を意味するのかを最初に確認しておきたい。次にそうしたエクセレンスの追求の展開を，日本とドイツを比較する視点から確認してみたい。ここでドイツの事例を参照するのは，日本に比べてドイツの大学政策がより賢明な仕方で遂行されているからでも，ドイツの大学改革が日本のモデルになりうると考えられるからでもない。そうではなく，私たちが今日直面している大学の研究教育環境の激変が，日本固有のローカルな事象ではなく，グローバルな規模で進行する構造変化の一部であることを確認しておきたいのである。大学も一般企業と同様にグローバルな競争にさらされているという認識のもと，そうした競争に適応した組織へと大学を変革する動きは，日本でもドイツでも同様に観察される。その結果，後に確認するように，ドイツと日本の大学の風景は，驚くほど似通ってきている。この点を確認したうえで，ドイツにおける人文学の危機をめぐる議論からハンス・ウルリヒ・グンブレヒトの考察を参照し，最後に大阪市立大学文学研究科の置かれた状況についてごく簡潔に考察を加えてみたい。

エクセレンスの大学

すでに述べたように，「エクセレンスの大学」という概念は，文学理論研究者のビル・レディングズが，1996 年に出版した著書『廃墟の中の大学』で提唱した概念である。この著書において，レディングズは，グローバル化の進展にともなう国民国家の衰退のなかで，大学がトランスナショナルな企業体として自己を組織しなおす際に依拠する理念が「エクセレンス」であると指摘している[4)]。レディングズが「エクセレンス」―― 日本語では「卓越性」と訳されることが多い ―― という言葉に注目するようになったきっかけは，1990 年代にアメリカやカナダの大学の学長や理事長が，大学改革を進めるにあたってみずからの意図をこぞって「エクセレンスの実現」という言葉で正当化し始めたことだった（UR30）。レディングズは「エクセレンス」という言葉のこうした急浮上を，近代社会において大学という制度を支えてきた理念の失効を示す徴候だと理解した。1990 年代にいたって大学はみずからの社会的役割を再定義する必要に迫られたのであり，その際に新しい理念として採用されることになったのが「エクセレンス」だったというのである。

では近代の大学を支えてきた理念およびその社会的役割とは何だったのだろうか？　レディングズは，近代の大学のモデルとなったフンボルトやフィヒテの構想を検討しながら，近代の大学の社会的使命は，国民国家の主体を作り出すこと，つまり理性的に思考し，議論し，政治参加する成熟した市民を作り出すことにあったと指摘

する（UR68-69）。さらに彼は，そうした国民国家の主体の形成にあたって規範的な役割を果たしたのは，「文化」の理念だったと述べる（UR64）。個人は大学で文化を学ぶことで国民の一員となり，みずからを文化の担い手へと自己形成することによって主体となる。こうしたプロセスが進行するのが，近代の大学であった。大学において文化は，研究の対象であるばかりでなく，それに参画し，享受し，創造する主体の育成プロセス，つまり陶冶のプロセスでもあった。つまり，文化は，大学において研究と教育を統合する原理として作用していたのである。ちなみに，ここで文化と呼ばれているのは，教養・陶冶（Bildung）としての文化であり，その内容は文学や芸術に限定されなかった[5]。しかし，こうした大学において，哲学や文学をはじめとする人文学が重要な役割を果たしていたことは間違いない。

レディングズは，グローバル化の進展とともに生じた国民国家の衰退によって，すなわち，国民国家が資本主義の基本単位であることをやめ，両者の発展がもはや歩調を合わせなくなり，資本主義が国民国家に対して規制の緩和をいたるところで要求する時代の到来によって，大学は国民国家の主体の生産という社会的機能を喪失し，みずからをトランスナショナルな企業的組織として再定義することになったのだと診断する（UR44-53）。こうした再定義のプロセスは，典型的には，「大学は金がかかりすぎる」，「大学は社会（企業）の要望に応えていない」という非難の高まりに促されるようにして進行する。そして，このとき「文化」に代わって登場するのが，「エクセレンス」という理念である（UR117）。近代に生まれた「文化の大学」は，いまや「エクセレンスの大学」として自己を再定義しようとしているというのがレディングズの主張である（UR41-42）。

では，この「エクセレンス」とは何を意味しているのだろうか？　それはどんな価値を表しているのだろうか？　この問いに対する答えは，エクセレンスとは空虚であり，なにものも積極的には意味していない，というものだ。レディングズは，エクセレンスとは「完全に閉じたシステムの諸要素の間に相対的な順位づけを付与する手段」であると述べている（UR27，傍点原文）。すなわち，エクセレンスとは，なんらかの実質的な内実を指し示す概念ではなく，完全に閉じたシステムの内部における純粋に示差的な価値の尺度にすぎないのである。このことは具体例を観察するとただちに明らかになる。エクセレンスが典型的な形で明示されるのは，大学ランキングにおいてである。大学ランキングは，いくつかの観点にもとづいて，各大学のエクセレンスを測定し，数値化し，序列化したものだ。現在，最も影響力のあるランキングのひとつは，『タイムズ・ハイアー・エデュケーション』誌（*Times Higher Education*）の「世界大学ランキング」であろう[6]。このランキングで特徴的なのは，順位づけのもとになるポイントの算出方法である。各大学に付与されるポイントは，データ全体の平均値からの差異（偏差）によって決まるのである。たとえば，留学生比率という項目を取り上げてみよう。このランキングでは，すべての大学のこの項目に関するデータを偏差値のように処理して平均値を突き止め，個々の大学の数値がその平均値をどのくらい上回っているか（または下回っているか）によって，ポイントが決定される[7]。つまり，平均を上回る度合が大きくなればなるほど，エクセレントな留学生比率を実現しているということになる。しかし，これは良く考えればおかしな話である。留学生が多ければ多いほど良いなどということはなく，理想的な留学生比率というものがどこかに存在するはずである。そして，その比率は決して一律に決まるものではなく，それぞれの大学で行なわれている教育の理念 —— あるいはイデオロギー —— にしたがって異なってくるだろう。しかし，こうしたランキングが測定するエクセレンスは，そうした価値に関わる一切の議論 —— イデオロギー闘争 —— を括弧にくくり，省略してしまうのである。こうしたランキングは，理想的な，目標とされるべき留学生比率を一切定めることなく，評価を行うのである。エクセレンスとは内実を欠いた純粋に示差的な価値の尺度であるという定義は，こうしたことを意味している。

しかしながら，レディングズが強調しているように，エクセレンスのそのような空虚さは，まさしくその強さの源泉でもある。「要点は，エクセレンスが何であるのかを誰も知らないということではなく，誰もがエクセレンスが何であるのかについて自分なりの考えを持っているということである。そして，ひとたびエクセレンスが組織原理として一般的に受け入れられてしまえば，異なる定義について議論する必要はなくなるのである」（UR32-33，傍点原文）。こうしてエクセレンスという理念は，教育・研究・管理運営などの大学の諸機能を，価値についての議論に一切立ち入ることなく評価し，統一的に管理することを可能にする。エクセレンスという理念によって，大学の諸機能を企業経営の論理によって，つまりインプットとアウトプット，コストとベネフィットの最適比率という観点にもとづいて管理できるようになる。実際，大学ランキングとは，企業的組織としての大学のパフォーマンスを出資者である政府や企業，および大学のサービスを購入する消費者である学生とその両親に対して開示するものである。したがって，エクセレンスの大学とは，みずからを企業的組織として定義する大学であり，学生とその親を消費者（顧客）として理解する大学のことでもある（RU27）。

日本とドイツにおけるエクセレンスの追求

では日本とドイツにおいて，どのようにエクセレンスという理念が導入され，その追求が政策的に奨励されていったのかを簡単に確認してみたい。これは大阪市立大学文学研究科の都市文化研究への重点化を規定するグローバルな文脈でもある。

日本では 2001 年に文科省が策定した「大学の構造改革の方針」にもとづいて，2002 年度から「21 世紀 COE プログラム」が始まった。言うまでもないことだが，COE とは Center of Excellence の略称である。このプログラムは大学に競争原理を導入することで世界的に競争力のあるトップレベルの研究拠点を作ることを目的としていた。すでに述べたように，文学研究科は最初の年度に「都市文化創造のための人文科学的研究」という題目で応募し，見事採択された。この COE 事業について確認しておきたいのは，以下の点である。COE プログラムの根拠となっている「大学の構造改革の方針」は，次の三つの柱からなっていた[8]。(1) 国立大学の再編・統合を大胆に進める。(2) 国立大学に民間的発想の経営手法を導入する。(3) 大学に第三者評価による競争原理を導入する。ここから明らかになるのは，日本においても，エクセレンスの追求はグローバル化への対応および企業的経営手法の大学への導入と密接に結びついていたということである。

この COE プログラムは，2007 年度に「グローバル COE プログラム」（以下，GCOE と略記）に引き継がれる。これは COE の基本的な考え方を引き継ぎながらも，若手研究者の養成により重点を置き，国際的に卓越した研究拠点を形成することを目的としていた[9]。これには大阪市立大学都市研究プラザが応募し採択されている。さらにこうした事業の流れにあるものとして，2013 年度には「研究大学強化促進事業」が開始されている。これは公募ではなく，機関データをもとに文科省がヒアリング対象を選定し，審査する形をとった。制度設計としては，約 30 大学（実際に選定されたのは 19 大学と 3 大学共同利用機関法人）に対して，研究マネジメント人材の確保や研究環境改善のために，年度ごとに 2 億～4 億円を 10 年間助成するというもので，COE 事業によって始まった大学の機能分化をさらに推進する施策である[10]。そして，2014 年度には，国際競争力のある研究拠点の形成をさらに強力に後押しするために，「スーパーグローバル大学創成支援事業」の公募が行われ，9 月末に審査結果が発表された。この事業の概要説明によると，年間 5 億円が支給されるタイプ A（トップ型）には，世界ランキングトップ 100 を目指す大学が選定されることになっていた[11]。大阪市立大学はタイプ B（グローバル化牽引型）に応募したが落選している。こうして見ると，日本では COE 事業以来，エクセレンスの追求が大学の機能分化の推進と結びつく形で展開していることが確認できる[12]。

一方ドイツでは，日本よりやや遅れて 2006 年からエクセレンスを追求する拠点形成事業が開始された。「エクセレンス・イニシアチヴ」と名付けられたこのプログラムは，「学問の立地としてのドイツを持続可能な仕方で強化し，国際競争力を高め，大学および科学研究領域のトップ層をよりはっきりと可視化すること」を目的として開始された[13]。第 1 期（2006/07～2011/12 年）はすでに終了し，現在，第 2 期（2012/13～2016/17 年）が実施されている。このプログラムは三つの部門から構成される。中心となるのは「エクセレンス・クラスター」と呼ばれる部門で，大規模な学際共同研究拠点を助成するプログラムである。日本の GCOE に近いと言えるだろう。次に「博士課程学校」と呼ばれる部門があり，これは若手研究者の養成を目的としている。最後に「将来構想」と呼ばれる部門があり，これは世界的な研究拠点を目指す大学の将来設計に対して助成するもので，大学の構造改革を強力に後押しする部門として設計されている。この最後の部門への申請は，エクセレンス・クラスターか博士課程学校のどちらかに少なくとも一つ選定されていることが条件となる。エクセレンス・イニシアチヴに選定された大学が「エリート大学」と呼ばれメディアでもてはやされる一方で，こうした拠点形成事業の推進は，従来のドイツの分権的で多彩な大学環境に大きな変化をもたらしており，激しい議論を巻き起こしている[14]。

ドイツの大学環境の変化で注目に値するのは，大学の機能分化と研究機能の強化を目的としたエクセレンスの追求が，大学の教育機能の大規模な改革と同時進行していることである。この教育機能の改革は，1999 年にボローニャで EU の教育相が合意したのに因んで「ボローニャ・プロセス」と呼ばれているが，2000 年代後半からドイツでも本格的に実施に移された。簡潔にまとめれば，ボローニャ・プロセスが目指しているのは，教育機能の簡素化（知識伝達への特化），効率化（学士課程の原則 3 年修了とカリキュラムのモジュール化），国際的な共通規格化（ヨーロッパ域内での単位通用性の確立）である。これはグローバル化した労働市場に対応した人材の育成に眼目を置いている[15]。エクセレンス・イニシアチヴとボローニャ・プロセスの同時的な推進は，研究と教育の構造的分離をもたらし，ドイツの大学の伝統であった研究と教育の一体性を解体しつつあると言えるが，いずれの施策もグローバル化への対応である点では変わりがない。そして，研究大学におけるエクセレンスの追

求と学部教育におけるグローバル人材育成への焦点化という組み合わせは，日本における「スーパーグローバル大学創成支援事業」と「グローバル人材育成推進事業」の組み合わせと同じものだとみなすことができる[16]。その成立の歴史的文脈の違いから，これまでかなり異なる姿を示してきたドイツと日本の大学の風景は，現在，驚くほど類似してきているのである。

人文学の問いと「リスクをはらんだ思考」

ドイツのエクセレンス・イニシアチヴは，日本のGCOEなどとは異なり，学問領域やテーマによる区分を事前に設定せずに公募と審査がなされている。その結果，エクセレンス・クラスターの採択プログラムのうち，約70％を自然科学と医学が占め，人文学はわずか11％に過ぎないのが現状である[17]。したがって，知識詰め込み型のボローニャ・プロセスと合わせて，ドイツの大学改革は，しばしば人文学の危機として論じられる。ここではこうした危機を出発点にして人文学のポテンシャルを考察した論考として，ハンス・ウルリヒ・グンブレヒトの講演を参照し，人文学の研究と教育を考える糸口としたい。

グンブレヒトはドイツ生まれの文学研究者だが，ドイツの大学で教えた後，1989年にアメリカに渡り，現在までスタンフォード大学の教授を務めている。とはいえ，グンブレヒトはドイツの大学でも定期的に教鞭をとっており，ドイツとアメリカの大学のいずれに対してもインサイダーでありアウトサイダーでもあるという独特の立場にいる人物だと言えるだろう。グンブレヒトは2010年6月8日にオスナブリュック大学に招かれ，「なぜ精神科学を改革せねばならないのか？　ややアメリカ的な問いかけ」と題された講演を行なった。この講演の中でグンブレヒトは，ドイツにおける人文学の変転をグリムから現在まで辿り，今日の人文学が置かれた状況に考察を加えている。ここでは，彼が人文学のポテンシャルの核心とみなす「リスクをはらんだ思考」というものにのみ触れておきたい[18]。

この講演の後半でグンブレヒトは，博士課程院生向けのコロキウムにおけるニクラス・ルーマンの発言を引きながら，「学問というシステムは，他のあらゆる社会システムとは異なり，複雑性を縮減するのではなく（…）むしろ増大させるべきであり，世界をより複雑にすべきである」[19]と主張し，そうした世界をより複雑にする思考を，「リスクをはらんだ思考」と名づける。「しかしなぜ世界をより複雑にすることが大切なことでありうるのでしょうか？　それは，そうすることによって（…）ありうる変化のポテンシャルが作り出されるからです。社会を柔軟に保つことが重要だとするなら，そのとき前面に出るのは，綱領的な変化ではなく，変化の可能性としてのポジティヴな異化作用です。（…）私は，精神科学につねに存在し，また存在してきた複雑性を増大させるそうした思考実践を「リスクをはらんだ思考」と呼んできました。というのも，ひとはそうした思考 —— 反直感的な思考 —— を日常的な実践の文脈のなかでは遂行できないと思うからです」[20]。グンブレヒトにとって，そのような思考を実践するときにこそ，精神科学あるいは人文学は真に取り組むに値するものになる。世界をより複雑にする思考とは，いまある現実とは異なる現実を想像することを通して，一枚岩に見える現実に風穴を開け，可能な変化のポテンシャルを発見するような思考である。答えとして与えられた現実を開かれた問いとして捉え返すような思考と言ってもよいだろう。

グンブレヒトは人文学を特徴づける「リスクをはらんだ思考」の具体例として，フランスの哲学者ジャック・デリダが初めてドイツで客員教授をしたときに起こったあるエピソードを紹介している。それは1988年のことで，ちょうどハイデガーのナチズムへの関与を示唆する文書が新たに見つかり，ハイデガー論争が巻き起こっていたときだった。ハイデガーはナチなのか，それとも20世紀最大の哲学者なのかという問いが，さかんにメディアで論じられていた。そんなある日，ゼミでハイデガーを読んでいたデリダに対して，ひとりの学生がおずおずと質問する。「先生はハイデガーがナチズムに関与していたことを知らないのですか？」それに対するデリダの答えは，次のようなものであったという。「もちろん知っています。でも本当に興味深く，また重要でもあるのは，ハイデガーはナチズムに接近することなしに20世紀最大の哲学者でありえただろうかという問いなのです」[21]。デリダはここで，ハイデガーはナチなのか偉大な哲学者なのかという単純な二者択一を，より複雑な問いに置き換えている。ハイデガーが偉大な哲学者であることとナチに接近したこととの間には，どのような関係があるのだろうか？　この問いは世間を賑わした問いよりもはるかに複雑で，容易に答えることのできない問いである。それはあり得たかもしれないいくつもの現実を想像してみるように誘う。そしてその問いはまた，リスキーな，きわどい問いでもある。「いずれにしてもこれは市民大学やギムナジウム〔高校〕で議論すべき問いではないでしょう」[22]。こうした問いを問うのが，グンブレヒトの言う「リスクをはらんだ思考」である。リスクをはらんだきわどい問いを提起し，それについて合意を前提せずに議論し，そうすることによって世界を複雑化すること。こうしたことのできる場所が，この社会には存在しなければならない。それが大学であり，とり

わけ人文学の教室なのだとグンブレヒトは述べている[23]。

文学研究科の現在

では最後に，ここまでに考察してきた事柄を大阪市立大学文学研究科を取り巻く状況に関係づけて，この試論の結びとしたい。

まず文学研究科だけでなく，大阪市立大学全体が直面している状況として，大学の機能分化という問題がある。さきほどドイツと日本の例で確認したように，エクセレンスの追求は大学の機能分化と密接に結びついている。そして，それは日本でもドイツでも，旧来の大学間のヒエラルキーを強化し固定化する傾向にある[24]。日本に関して言えば，文部科学省による大学の機能分化の強力な推進によって，旧帝大系の大学とそれ以外の大学との格差が目に見えて拡大していくと予見できる。文科省が 2013 年に公表した「国立大学改革プラン」では，大学の機能分化の一層の推進が掲げられ，そのために運営交付金の一部を競争資金化することが明記されているが[25]，このプランによると，すべての国立大学は，(1) 世界最高の教育研究の展開拠点，(2) 全国的な教育研究拠点，(3) 地域活性化の中核拠点のいずれかの役割をみずから選択すべきだとされている。こうした流れを受けて，地方国立大学では「ミッションの再定義」の名の下に教育学部や人文系学部を廃止・縮小する動きも出てきている[26]。公立大学はこのプランの影響を直接に受けるわけではないが，各種の競争的資金などを通していずれかの役割へと誘導されていくことになるだろう。その場合，都市大阪に立地する公立大学として，大阪市立大学に一番なじみやすいのは，(3) の地域活性化の中核拠点という役割である。大阪に立地する公立大学として，この都市の問題に積極的に取り組み，地域の文化的活性化に貢献することは，確かに重要なミッションである。また，そうした観点から大阪市立大学文学研究科が大阪を対象とする都市研究に重心を置くことも当然だと言えるかもしれない。とはいえ，まさに大阪という大都市に立地する大学だからこそ，大阪を越えて，アジア諸国，そして，アメリカやヨーロッパにまで広がる展望を提示することも重要な役割となるはずである。

いずれにしても，こうした大学を取り巻く環境の激変のなかで，文学研究科が COE 以来選択してきた教育研究機能の強化戦略も再考を迫られている。すでに述べた大学の機能分化の政策的推進や，ここ数年の大型競争的資金，とりわけ研究拠点形成に関わる競争的資金の動向を検討すると，今後，文学研究科がかつての COE のような規模の研究拠点形成型の外部資金を獲得する可能性は極めて低いと判断せざるをえない。そうであるならば，これだけ多様な専修が揃い，それぞれが十分に研究教育機能を保持している文学研究科にふさわしいのは，組織ではなく個の強化に重点を置き，個々の研究者の活躍を通して研究科の強化を進めることだと思われる。特定テーマにもとづく研究拠点形成のために，大きな枠組みを設定して個々の研究者の活動を縛るのではなく，個々の研究者の活動から生まれるネットワークや共同研究の芽を研究科に活かしていく方が効率的かつ効果的であろう。

最後に，これから文学研究科に期待される役割として，グローバル人材の育成があるのでこれにも触れておきたい。すでに確認した通り，グローバル人材の育成はエクセレンスの追求のもうひとつの側面であった。文科省の資料によれば，育成されるべきグローバル人材の資質とは，(1) 語学力・コミュニケーション能力，(2) 主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命感，(3) 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティだとされている[27]。グローバル人材育成が大学の使命となることによって，人文学はとりわけ (3) の資質の育成手段，つまりグローバル人材のための多文化主義的教養教育となる可能性がある。グローバル人材育成の多文化主義は，英語のグローバルな通用性を基盤にしたものであり，文化的差異を規範からの等価的な偏差として均質化してしまう[28]。その結果，もっぱら英語だけを用いて異文化理解の重要性を声高に主張するというような矛盾した状況が生まれることになる[29]。それは差異をカタログ化し，消費可能なものにしてしまうことに他ならない。この点で多文化主義はエクセレンスの論理とも相性がよい。一方，カタログ化に抵抗する他者，自分とは別の仕方で存在している他者を想像することは，もうひとつの現実を想像することであり，世界を複雑化する「リスクをはらんだ思考」の実践となるだろう。この点から言うならば，文学研究科の社会的役割は，人文学的思考によって，他者に対する知識に裏付けられた想像力を鍛えることだと言えるだろう[30]。

注

1．中村圭爾「文学研究科 50 周年記念事業」，『人文研究』第 56 巻，大阪市立大学文学研究科，2005 年，224 頁。

2．60 周年記念シンポジウムにおける谷富夫先生，塚田孝先生の発言。

3．栄原永遠男「都市文化研究センターの活動」，『都市文化研究』5 号，2005 年，88-91 頁。栄原永遠男／山野正彦「都市文化研究センターの活動」，『都市文化研究』6 号，2005 年，102-103 頁。

4．cf. Bill Readings, *The University in Ruins*. Cambridge, Massachusetts and London: Harvard University Press, 1996, p. 44. 以下本書からの引用は UR と略記し，ページ数とともに本文中に記す。日本語訳は『廃墟のなかの大学』（青木健・斉藤信平訳，2000 年）として法政大学出版局から出版されているが，本論ではすべて原書から著者が訳し，原書のページ数のみを掲げる。

5．歴史家のラインハルト・コゼレックによれば，19 世紀のドイツ

で成立した教養の理念は，個人の〈人間性〉を特徴づける多面的な性質や能力の調和に満ちた自己形成を意味しており，教養ある個人の関心領域には哲学や文学や芸術だけでなく，自然科学も含まれていた。Reinhart Kosellek, “Einleitung － Zur anthropologischen und semantischen Struktur der Bildung”, in *Bildungsbürgertum im 19. Jahrhundert Teil II*, Ed. Reinhart Kosellek. Stuttgart: Klett-Cotta, 1990, pp. 11-46.

6．文科省が 2013 年 11 月に発表した「国立大学改革プラン」では，この施策の目標のひとつとして，2023 年までに「世界大学ランキング」のトップ 100 に日本の大学が 10 校ランクインすることが掲げられている。文部科学省「国立大学改革プラン」，http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/11/__icsFiles/afieldfile/2013/11/26/1341852_01_4.pdf（最終閲覧 2014 年 9 月 5 日）。

7．ランキングの算出方法の詳細については以下のウェブサイトを参照のこと。*Times Higher Education*. World University Ranking 2013-2014 methodology. http://www.timeshighereducation.co.uk/world-university-rankings/2013-14/world-ranking/methodology

8．文部科学省「大学（国立大学）の構造改革の方針」（平成 13 年 6 月），http://www8.cao.go.jp/kisei/giji/004/4.pdf（最終閲覧 2014 年 9 月 5 日）。

9．日本学術振興会「グローバル COE プログラム」，http://www.jsps.go.jp/j-globalcoe/（最終閲覧 2014 年 9 月 5 日）。

10. 文部科学省「研究大学強化促進事業」，http://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/sokushinhi/index.htm（最終閲覧 2014 年 9 月 5 日）。大阪市立大学はヒアリング対象に選定されなかった。

11. 日本学術振興会「スーパーグローバル大学創成支援」，http://www.jsps.go.jp/j-sgu/index.html（最終閲覧 2014 年 9 月 5 日）。

12. 明治時代から現在にいたる日本の大学制度の歴史を簡潔に概観した著作として，次を参照のこと。吉見俊哉，『大学とは何か』，岩波新書，2011 年，特に 108-256 頁。

13. Deutsche Forschungsgemeinschaft, *Exzellenzinitiative des Bundes und der Länder*. http://www.dfg.de/foerderung/programme/exzellenzinitiative/（最終閲覧 2014 年 9 月 5 日）。

14. 例えば次の著作を参照。Konrad Paul Liessmann, *Theorie der Unbildung. Die Irrtümer der Wissensgesellschaft*. München: Piper Verlag, 2008. Richard Münch, *Die akademische Elite*. Frankfurt: Suhrkamp, 2007. また日本語で読めるドイツの大学改革に関する批判的論考として，次も参照のこと。小林敏明，「ネオ・リベラルの大学改革と人文学の危機」，『人文学と制度』（西山雄二編），未来社，2013 年，119-127 頁。

15. ボローニャ・プロセスの批判的分析としてリースマンの前掲書を参照。Konrad Paul Liessmann, *Theorie der Unbildung*. pp. 104-123. また次の論考も参照のこと。大場淳，「欧州高等教育再編と人文科学への影響」，『哲学と大学』（西山雄二編），未来社，2009 年，206-223 頁。

16. グローバル人材育成推進事業は，2014 年に「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業と改称され，「スーパーグローバル大学創成支援事業」とともに，「スーパーグローバル大学等事業」にまとめられた。ちなみに大阪市立大学は本事業にも応募し，落選している。日本学術振興会，「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」，http://www.jsps.go.jp/j-gjinzai/index.html（最終閲覧 2014 年 10 月 25 日）

17. 採択拠点・テーマ一覧（注 12 のサイトに記載）から著者が集計。

18. 周知の通り，ドイツ語の「精神科学」（Geisteswissenschaft）という概念には，19 世紀末にディルタイによって強い規定が与えられた。すなわち，精神科学は「解釈」を根本原理とする，自然科学（Naturwissenschaft）とは本質的に異なる学問的営みとして定義された。グンブレヒトもこの講演の中でディルタイの功績を検討しているが，全体としてはこの言葉をディルタイの定義よりも広い意味で用いている。したがって，本論ではグンブレヒトの考察を人文学についての考察として読み解くことにする。なお人文学を「科学」とみなすこと（「人文科学」という呼称）の問題点については，次の論文を参照のこと。野家啓一，「人文学の使命 —— スローサイエンスの行方」，『研究する大学 —— 何のための知識か』，岩波書店，2013 年，165-195 頁。

19. Hans Ulrich Gumbrecht, *Warum soll man die Geisteswissenschaften reformieren?* Göttingen: V&R unipress, 2010, p. 24.

20. ibid., p. 25.

21. ibid., p. 26.

22. ibid., p. 26.

23. ibid., p. 26.

24. 2014 年 9 月末に発表された「スーパーグローバル大学創成支援」事業のトップ型採択リストにもこの傾向がはっきり現れている。日本学術振興会，「スーパーグローバル大学創成支援　審査結果」，http://www.jsps.go.jp/j-sgu/kekka.html（最終閲覧 2014 年 10 月 26 日）。ドイツについては，リヒャルト・ミュンヒの前掲書における実証的データにもとづく分析結果を参照のこと。Richard Münch, *Die akademische Elite*, pp. 373-406.

25. 注 6 を参照。

26. 文部科学省「国立大学改革について」，http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/1341970.htm（最終閲覧 2014 年 9 月 5 日）

27. 文部科学省「グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進会議　審議まとめ）」，http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf（最終閲覧 2014 年 9 月 5 日）。

28. Bill Readings, *The University in Ruins*, p. 113.

29. Konrad Paul Liessmann, *Theorie der Unbildung*, p. 136.

30. G・C・スピヴァク，「他のアジア」，『スピヴァク，日本で語る』，みすず書房，2009 年，123-155 頁参照。

University of Excellence, Humanities, and City: Contextualizing the Recent Trajectory of the Faculty of Literature and Human Sciences at Osaka City University

Takeshi EBINE

Similar to most Japanese universities, Osaka City University and its faculty members have been struggling to cope with continuously increasing demands from various stakeholders (politics, industry, parents, and students) to manage research and education activities more effectively and efficiently. In 2002, as a part of this effort, the Faculty of Literature and Human Sciences (FLHS) applied successfully for the 21st Century Center of Excellence (COE) Program funded by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. In the course of this program, the FLHS concentrated a part of its resources on the field of Urban Culture Studies, focusing on East Asia and Osaka. It is this COE Program and its legacy that have shaped the current profile of the FLHS. This study examines the trajectory of the FLHS over the last ten years in the context of the global transformation of higher education and provides certain insights on the challenges they face. First, it recapitulates the discussion on the idea of *excellence* proposed by Bill Readings as a key concept for analyzing the ongoing transformation of universities in many developed countries facing the challenges of globalization. Second, it compares the introduction and implementation process of the idea of excellence in higher education policy in Japan and Germany. This observation reveals the stunningly similar developments between the two countries and highlights the global context of university reforms in Japan. Third, it refers to the discussion on the crisis of the Humanities in Germany. In particular, it examines the concept of "risky thought" proposed by Hans Ulrich Gumbrecht to characterize the potential of the Humanities. Finally, summarizing key findings in the previous discussion, this study analyzes the current situation of the FLHS and its future prospects as a research and education institution. This study concludes that it is necessary for the FLHS to rethink its strategy to enhance its presence as a research institution and to affirm the social role of the Humanities in training the imagination of the other in the era of globalization.

Keywords：Excellence, Humanities, University Reform, City, Globalization